

ペルシア語母語話者が日本語の受身文を学習する際の 誤用分析 —アンケート調査の結果—

ファルザネ・モラデイ (一橋大学)

Questionnaire Survey Based Analysis of Misapplication of the Passive Form by Native Persian Speakers While Learning Japanese

Farzaneh Moradi (Hitotsubashi University)

キーワード：日本語、ペルシア語母語話者、受身文、調査、誤用

Keywords: Japanese, Persian native speakers, passive sentence, misapplication

SUMMARY

The research paper analyzes the mistakes and explores the reasons behind the misapplication of passive form in Japanese language by the native Persian language speakers. The research is based on the results of the questionnaire survey conducted by the author focusing on native Persian language speakers learning Japanese language.

1. はじめに

ペルシア語母語話者が日本語を学習する際には、日本語のいくつかの文法項目において、戸惑ったり、誤用をおかしたりする。その一つが受身文である。日本語教育の現場では、受身文を初級レベルの後半で学習するが、上級まで進んだ学習者でさえそれを使いこなしているとは言えず、誤用をおかしやすいのが現状である。

本稿では、アンケート調査の結果をもとに、ペルシア語母語話者が日本語の受身文を学習する際の誤用に着目し、具体的な誤用例を通して、どのような誤りが現れているのかを整理し、その誤りの原因を探る。

2. 日本語とペルシア語における受身文の対照

日本語とペルシア語の受身文に関する対照研究は、管見の限りでは二つしか出されていない。五十嵐 (2007) は、ペルシア語における受身文の使用状況について、そして五十嵐 (2008) では、日本語とペルシア語受身構文を対照し、ペルシア語において、日本語の間接受身文に当たる表現はペルシア語では不可能であることなどを論じてい

る。ペルシア語においては、能動的な表現が好まれる傾向にあり、五十嵐（2008）の記述にもあるが、ペルシア語母語話者の間では、ペルシア語の受身文の意味・用法が一般的に認知されているものの、実際の使用頻度はそれほど高くないのが実情となっている。例えば、次の例文を見てみよう。

1. 花子は 子供に 夜中に 泣かれた。

bacheye Hanako nesfe shab gerye kard. →直訳：花子の子供は夜中に泣いた。

2. 私は 妹に ケーキ を 食べられた。

khaharam keike man ra khord. →直訳：妹が私のケーキを食べた。

上記例文は、それぞれ同様の事象を日本語とペルシア語で表したものである。しかし、日本語の例文は受身文であるのに対して、それをペルシア語で表そうとすると能動文になる。このように文のモダリティが異なる一つの要因は、ペルシア語における自動詞が受身文をつくることができないことに起因する。

次の例文を見てみよう。

in miz be daste baradaram sakhte shod. →翻訳：このテーブルは兄に（よって）作られた。

この文章は、日本語の直接受身文とも対応しており、ペルシア語母語話者に受身文として認められ、使用される場合もあるものである。しかし、日常生活においては、その能動文、つまり、

3. In miz ra baradaram sakht. →翻訳：兄はこのテーブルを作った。

が通常では使用される。五十嵐（2008）がすでに指摘しているように、日本語とペルシア語における能動文と受身文の使用頻度には違いがあり、まさにそこに大きな問題があるといえる。

ペルシア語における受身構文は、能動構文と対応し、動作主（主語）は表記されない（時には、話し手・書き手の関心によって表記される場合もあるが、そのような場合は多くない。）。助詞の「ra（～を）」をともなう目的語は、被動者として主語に代わるものとなり、「ra」は省略され、さらに文末に補助詞「shodan（～される）」がきて、動詞が文章の主語と結びつき、人称変化を起こす。

Dabir Moghaddam(1985)によると、ペルシア語受身構文は次の二つの形式をとるという。

・被動者+名詞/形容詞+shodan の人称変形

この構造の例として、

uo az in kar agah shod.

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

彼は を この こと 知らされた（形容詞+shodan の三人称）→彼/彼女はこのことを知られた。

・被動者+他動詞の過去分詞形（他動詞の過去形+e）+shodan の人称変化形

この形式の例としては、

uo dar mehmani sdide shod.

↓ ↓ ↓ ↓

彼 で パーティー 見られた→ 彼/彼女はパーティーで見られた。

一方、森田（1990）は、動作主（A）、動作の影響を受ける受動者（B）、動作対象（C）の三つの項を含む日本語の受身文を、形式面から次の10種類に分類している（カッコの中の例文は筆者からの例文である）。

第1種の受身

- 1) A が 自V ⇒ (Bハ) Aニ 自Vレル (雨が降った→ (娘は) 雨に降られた)
- 2) A が Cヲ 他V ⇒ (Bハ) Aニ Cヲ 他Vレル (隣の人が足を踏んだ→ (私は) 隣の人に足を踏まれた)
- 3) A が Bノ Cヲ他V ⇒ Bハ Aニ Cヲ 他Vレル (妹が私のケーキを食べた→私は妹にケーキを食べられた)
- 4) A が Bニ Cヲ 他V ⇒ Bハ A (ニ/カラ) Cヲ 他Vレル (母が私に家の掃除を頼んだ→私は母に家の掃除を頼まれた)
- 5) A が Bニ 自V ⇒ Bハ A (ニ/カラ/ニヨッテ) 自Vレル (メディアが人の見方に影響する→人の見方はメディアに影響される)

第2種の受身

- 6) A が Cヲ 他V ⇒ Cハ Aニ 他Vレル (犬が私を噛んだ→私は犬に噛まれた)
- 7) A が Cヲ 他Vテイル ⇒ Cハ Aニ 他Vレル (自然がこの別荘を囲んでいる→この別荘は自然に囲まれている)
- 8) A が Cヲ Bニ 他V ⇒ Cハ A (ニ/カラ) Bニ 他Vレル (先生が私を発表に選んだ→私は先生から発表に選ばれた)
- 9) (Aが) Cヲ 他V ⇒ Cガ 他Vレル ((政権が) 人権を守る→人権が守られる)
- 10) (Aが) Cヲ Bニ 他V ⇒ Cガ Bニ 他Vレル ((神様が) 特別な能力を息子に与えた→特別な能力が息子に与えられている)

Dabir Moghaddam と森田が掲げている形式を比較して見ると、ペルシア語に比べて、日本語受身文の形式の多くは、ペルシア語において対応しない形式が存在している場合がある。両言語の受身文の大きな違いは、ペルシア語では動作主（主語）が表記されないのに対して、日本語では主に表記される場所にある。また、上述したように、ペルシア語の受身文の形式は、「被動者+名詞/形容詞+shodan の人称変形」「被動者+他

動詞の過去分詞形（他動詞の過去形+e）+shodan の人称変化形」であり、自動詞で作られる日本語の間接受身文に当たる表現はペルシア語では存在しない。

上記の相違点以外に、日本語においては、「自発・可能・尊敬」の述語動詞「れる」「られる」の形で作られる受身形と同様の形式を持つものがあるが、ペルシア語では、「自発」という文法概念は存在せず、「可能・尊敬」は受身とはまったく異なった形式が使われる。これらのことが、ペルシヤ語母語話者のこれらの文章の識別及び理解を困難にしているものと思われる。

上述の両言語の相違点が、どのような誤りをペルシア語母語話者に引き起こさせるかを見るため、以下の3つの質問項目を設け、アンケート調査を実施した。

大問1：日本語の受身文、とりわけ、ペルシア語では不可能な形式の受身文において、非常に大きな役割を果たしている助詞を選択できるかを見るための質問である。助詞の部分を空欄にした受身文を10問提示し、適切と思う助詞を記入してもらった（択式ではなく、自由回答式）。

大問2：日本語の「動詞+れる／られる」の表現には、「受身」「自発」「可能」「尊敬」の用例の中から「受身」を判別できるかを見るための質問である。

大問3：日本語の受身構文をつくる際に、どのような誤りをするかを調べる。特に、ペルシア語に存在しない日本語の間接受身文を、どのようにペルシア語訳するかを見るための質問である。提示した5つの能動文（日本語）を受身文（日本語）に変換してもらい、その中の受身文（日本語）のペルシア語訳してもらった。

3. アンケート調査の概要

以下の要領でアンケート調査を実施した。

実施時期：2012年11月

対象（回答者）：イランのテヘラン大学の日本語学習者（ペルシア語を母語とする人/男女比：男性11人・女性19人）

日本語の学習歴：テヘラン大学日本語学科（4年半制）学部3年生/学習時間は約1500時間

実施方法：質問用紙を配布し、回答者が回答し終えてから回収した。（回答には1時間を設けた。）

質問項目：質問項目は大きく3つに分かれる。

3.1 大問1（適切な助詞の選択）

大問1で使用した問題文と正答を次に示す。

- ① あの子供は、去年、祖母（ に ）死なれた。
- ② 彼は友達（ に ）殴られた。
- ③ この絵はダヴィンチ（ によって ）描かれた。
- ④ あのおじさんは近所（ から ）嫌われている。
- ⑤ 山田さんは奥さん（ に ）殺された。

- ⑥ 私は友達（ に ）本（ を ）失くされた。
- ⑦ 弟はスリ（ に ）財布（ を ）盗られた。
- ⑧ 私は先生（ に ）意見（ を ）求められた。
- ⑨ 花子は先生（ に ）作文（ を ）褒められた。
- ⑩ 太郎は次郎（ に ）ガールフレンド（ を ）けなされた。

この問題の回答をまとめてみると、以下のような図になる。

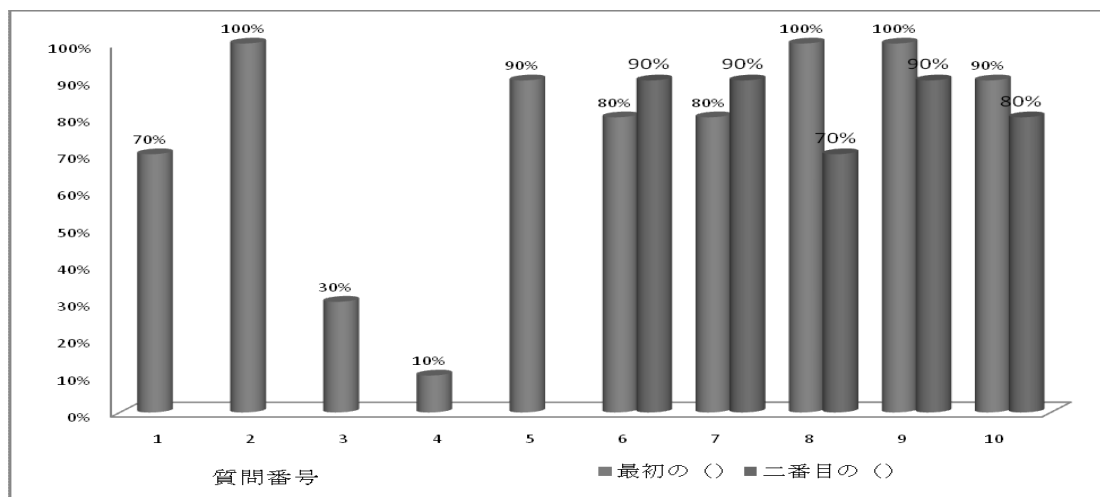


図 1：日本語の受身文の助詞選択に関する質問の正答数グラフ

以上の図を見ると、回答のうちで正答率が最も低かったのは③と④のカッコである。③には「によって」、④には「から」というマーカーを入れるべきであるが、それぞれ正答率は 30%にしかすぎなかった。多くの学習者は③と④の回答として、「に」を入れていた。こうした誤りが起きるのは、外国人に日本語の受身文を教えるとき、受身文の「に」は、動作主（動作を行う者）のマーカーであることが強調される傾向があるためではないかと思われる。事実、日本語の受身文を教える際、多くの場合、「に」「から」「によって」の説明があっても、それらのマーカーが、それぞれどのような状況で用いられるのかの説明は省かれることが多い。上述のようなエラーをなくするためには、受身文における「に/によって」、「に/から」の使い分けを明らかにして、学習者に説明する必要があると思われる。

3.1.1 受身文において「によって」が使われる場合

アンケートの大問 1 の③の例文、つまり、

- ③ この絵はダヴィンチによって描かれた。

では、「描く」という出現を表す動詞、つまり、ある動作の結果として、それまで存在しなかったものを新たに作り出すことを表す動詞が使われている。一般的に、このような意味特性を持つ動詞が使用される場合は、受身文の動作主は「によって」で表さ

れる。この用法を表す動詞の例としては、「建てる」、「書く」、「作る」、「発見する」などが挙げられる。

受身文で動作主を表すには、「に」がよく用いられるが、「によって」は「に」とは意味が異なる。「に」と「によって」の使い分けについて、益岡（1987）は Kuroda（1979）の研究を参考としている。それによれば、Kuroda は、助詞の「に」をとる受身文を「に受動文」(ni passive)、「によって」をとる受動文を「によって受動文」(ni yotte passive) と名付けている。そして、「に受動文」は「受影的 (affective) 意味を伴うが、「によって受動文」の方は受影的意味は表さず、対応する能動文と同義的である」と述べている（益岡 1987 : 181）。つまり、動作主を「に」で表すのは、受身文で主語に「動作主の影響」が及ぶ場合には、動作主のマーカーに「に」が使われる。それに対して、主語が動作主の働きかけを受けない場合には、「によって」が使用される。例として

1. 娘は犬に吠えられた。

この例では、主語、つまり「娘」は動作主である「犬」の影響を受ける。それに対して、次の、

2. 源氏物語は紫式部によって書かれた。

のような例では、主語「源氏物語」は動作主「紫式部」の働きかけを受けない。1 の例では、「吠える」という動作の前から「娘」が存在し、「吠える」ことが「娘」になんらかの影響を及ぼしたのである。しかし、2 の例では「源氏物語」は「紫式部」の「書く」という行為の前には存在しない。つまり、「源氏物語」は「紫式部」の行為の影響を受けたのではなく、「紫式部」の「書く」という行為の結果として生まれたのである。このような場合には、「によって」が用いられる。また、上の例でいうなら、能動文「紫式部は源氏物語を書いた。」と受動文「源氏物語は紫式部によって書かれた。」は、意味的に完全に同値である。しかし、「犬が娘を吠えた。」と「娘は犬に吠えられた。」の場合、完全に同値とは言えない。後者の受身文は「娘」が「犬に吠えられる」ことで、何らかの感情的作用を受けたことを示唆している。その意味で、「によって受動文」は動作がより中立的であると言える。

3.1.2 受身文において「から」が使われる場合

村木（1991）は「から」というマーカーは、主語（N₁）が人間を表す名詞であり、動詞が人間の態度や感情・感覚・言語活動などを表すもの、あるいは作品や情報の授受を表すものである場合に使われると述べ、さらに、多くの場合に「から」は「に」と交替させることができると述べている。村木（1991 : 193）は次のような例を挙げている。

3. 次郎は仲間から（に）慕われている。
4. 次郎は太郎から（に）褒められた。

しかし、鈴木（1978）が述べているように、「私は父に叱られた」「私は文子に惚れ

られた」などの受身関係の出発点を表すような例では、普通、動作主は「に」によって表される。鈴木は村木と同様に「に」は「から」によって置き換えることができると述べているが、「から」に置き換えた場合、「中には不自然さが感じられるものもある」と正しく指摘している。そして、人間も表す名詞・代名詞、それに「学校」「警察」「会社」「世間」などの擬人化できるものの場合には、「に」を不可とし、「から」のみとしており、次のような例を挙げている。

5. 人命救助で警察から表彰された。

6. あのおじいさんは隣近所からきられている。

アンケート調査の1の④において、「近所」はもともと場所を表す名詞であるが、ここでは提喻として人間（「近所の人々」）を指していると考えられる。したがって、「に」は使えず、「から」しか使用できないと言える。

3.2 大問2（「受身」を「自発」「可能」「尊敬」と判別）

大問2の問題と正答は以下の通りである。

- ① この実は食べられる。（可能）
- ② 居眠りをしている学生がちらほら見られる。（自発）
- ③ 下手なピアノを弾かれて、困った。（受身）
- ④ 部長は心臓の病気で、いつも薬を飲まれる。（尊敬）
- ⑤ 会談が日本時間の16日に予定されている。（受身）
- ⑥ 空気はきれいで、美味しく感じられる。（自発）
- ⑦ 春になれば、この動物をまた見られる。（可能）
- ⑧ 異動が人事院から発表された。（受身）
- ⑨ 高橋先生はこの本を去年、書かれました。（尊敬）
- ⑩ 遠くの船上に、二人の姿が眺められる。（受身）

この問題に対する回答は次の図のようであった。

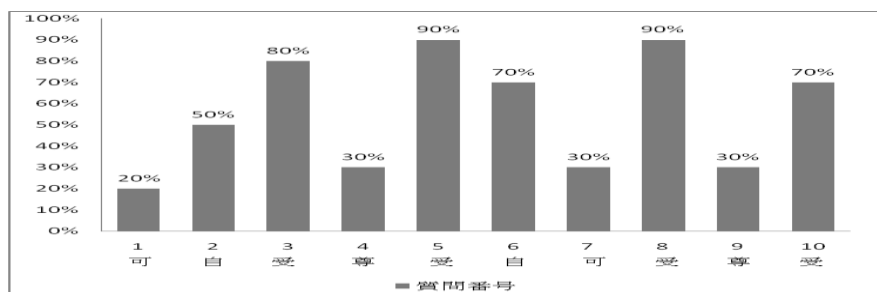


図2：それぞれの例文を「受身」として選んだ回答者の割合を示すグラフ

以上の図から分かるように、受身文を識別できた回答者の割合は、③、⑤、⑧と10

の問題においてそれぞれ 80%、90%と 70%であり、かなり高い正答率を示している。ところが、その一方で、「自発」「尊敬」「可能」の表現を受身文として選択した学習者の割合もかなり多かった。その割合は「自発」の表現、つまり、②と⑥の問題では、それぞれ 50%と 70%にも達した。尊敬表現の④と⑨の問題を受身文として選択した回答者は 30%と 30%、可能表現の 1 と 7 の問題を受身文として選択したのは 20%と 30%の順になっている。つまり、尊敬を受身と誤解したり、可能を受身と誤解したりするよりは、自発を受身と誤解する可能性の方が高いことになる。

このようなエラーの主な原因には、まず、ペルシア語では、「自発」という文法概念は存在せず、可能・尊敬と受身でまったく異なった形式が使われることがある。日本語では自発・可能・尊敬の述語動詞は「れる」「られる」の形をし、受身形と同じような形をしている。従って、これらの文章の意味の識別は非常に難しいと思われる。これは、ペルシア語母語話者のみならず、他の日本語学習者にも同じことが指摘できるだろう。外国人日本語学習者向けの文法の教科書においては、「この形式はこういう意味であり、このような場合に使われる」ということだけ教えられ、互いの用法の見分け方はほとんど教えられていないのが実情である。日本語学習者向けの文法の教科書において、これらの見分け方を教えることができれば、学習者の理解は深まるのではないかと推察する。次にそれぞれの見分け方について述べる。

3.2.1 受身と自発、尊敬、可能との見分け方

1. 受身と自発

寺村(1982)は受身と自発の相違点について、「受動表現(Y=XがV-(r) are -ru)ⁱと自発表現(XがV-e-ru)との顕著な違いは、その述語の表す事態を惹き起こしたものの存在が意識されているのといないのとの違いである」(寺村 1982: 273)と述べている。つまり、受身文の中では「Y」、すなわち動作主が存在するが、自発の表現では存在しない。寺村はさらに、受身文では「Y」が言及されない場合について、「受動表現でも、(中略)単に「Xが～」となることがあるけれども、そのことが誰かによってなされた結果だということが受動表現には含まれている。自発表現(中略)には、それがない」(ibid.)と述べている。例としては、アンケート調査の2の⑥の問題、

⑦ 空気はきれいで、美味しく感じられる。

では、述語の「感じられる」には動作主が存在せず、自然にそうなったという意味を持つ。それに対して、寺村があげている次のような例、

7. 歯が抜かれた。

では、「抜く」という動作が、明示されない動作主によって実行されていることが含意されている。つまり、「抜く」という動作をした者を、文の要素として補充しようとえばできるのである。ところが、自発表現ではそれができない。

受身文と自発のもう一つの相違点は、受身述語はどのような動詞からも作ることができるのに対して、自発は「見る」「聞く」「感じる」「思い出す」「案じる」などの精神作用や感覚作用を表す限られた動詞しか用いることがない。

2. 受身と尊敬

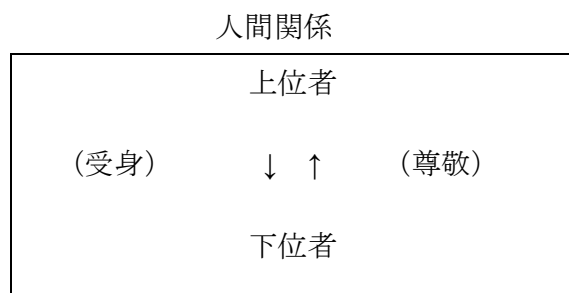
受身文と尊敬の相違点を明らかにするために、アンケート調査の2の⑧と⑨を比較してみよう。

⑧ 異動が人事院から発表された。(受身)

⑨ 高橋先生はこの本を去年、書かれた。(尊敬)

の受身文では、主語に立つ「異動」は、「発表される」という動作の対象となっている。それに対して、⑨の尊敬の表現では、主語の「高橋先生」が動作を行う主体となっている。つまり、主語と動詞の意味上の関係の違いが、受身と尊敬の顕著な違いである。さらに、受身文では主語の位置に人間、物語、動物などの名詞を置くことができるのに対して、尊敬の表現では、「先生」「社長」「部長」のような目上の人を示す名詞が多くの場合用いられるという違いもある。

森田(2002)によると、世良(1970)は日本語の発想という視点から、受身と尊敬における人間関係を次のように示している。



この図に使用されている「上位者」は自らある動作をする者、「下位者」は自ら何も動作をしない者を指し、受身と尊敬の縦の相互関係を説明している。この図によれば、受身と尊敬に関する視点は逆である。つまり、受身の視点を逆にすれば尊敬になることになる。この点は、日本語の発想法の特徴であるとも言える。

3. 受身と可能

受身と可能にはどのような見分け方があるのだろうか。まず、アンケート調査の2の①と③の例について考えてみる。①の、

① この実は食べられる。(可能)

に動作主(仮に「誰か」をする)をつけるとすると「誰かが、この実を食べられる(誰かが、この実を食べることができる。)」となる。この場合、動作をする者、すなわ

ち、「誰か」が「が格」をとり、「この実」は目的語として「を格」をとる。それに対して、

② 下手なピアノを弾かれて、困った。(受身)

に動作主(誰か)をつけた「誰かに下手なピアノを弾かれて、困った」では、動作をする人、つまり「誰か」が「に格」で表される。

つまり、可能と受身は、動作主が「が格」をとるか「に格」をとるかによって判別できることがわかる。さらに、「～れる／られる」を「～することができる」という言い換え表現で置き換えられるかどうかでも区別できる。

3.3 大問3(受身文を作りペルシア語訳する)

問題文(提示した能動文)と正答(受身文)は以下の通りである。

- ①彼女は僕の悪口を言った。→僕は彼女に悪口を言われた。
- ②皆が彼を笑った。→彼は皆に笑われた。
- ③友達は招待状を送りました。→友達に招待状を送られました/招待状が友達から送られました。(両者とも正答とする)
- ④鈴木さんは私の家の前に車を止めた。→私は鈴木さんに家の前に車を止められた。
- ⑤仲人夫人が花嫁の手を取った。→花嫁は仲人夫人に手を取られた。

この問題の正答数をまとめると次の図のようになる。

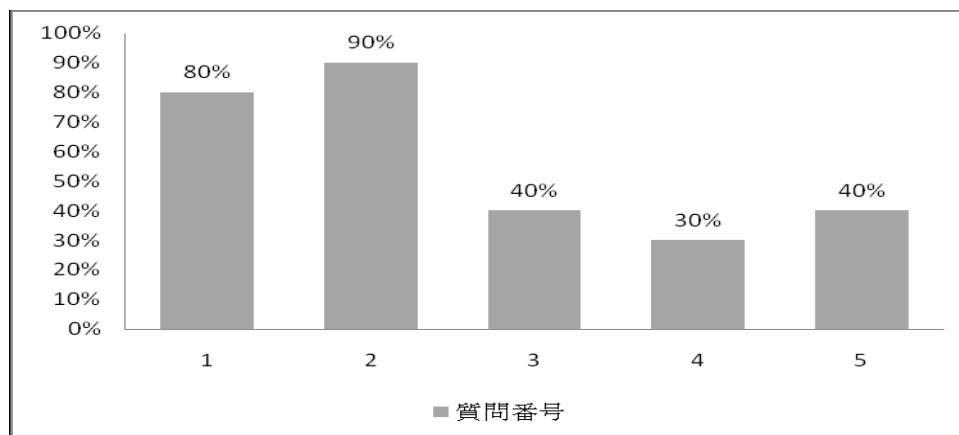


図3: 日本語の受身文を作る問題の正答数をまとめたグラフ

この問題の正答率が低かったのは、③、④と⑤の文である。以下では、それぞれに関して、学習者の誤用例を見てみよう。

3.3.1 アンケート調査におけるペルシア語母語話者誤用例

問題③. 「友達に招待状を送られました。」の誤用例

誤用例 1. 招待状が友達に送られた。

誤用例 2. 招待状が送られた。

誤用例 3. 受身文にならない。

誤用例 4. 友達に招待状が送られた。

問題④. 「私は鈴木さんに家の前に車を止められた。」の誤用例

誤用例 5. 車が鈴木さんに私の家の前に止められた。

誤用例 6. 鈴木さんに私の家の前に車が止められた。

誤用例 7. 私の家の前に鈴木さんに車が止められた。

問題⑤. 「花嫁は仲人夫人に手を取られた。」の誤用例

誤用例 8. 仲人夫人は花嫁の手を取られた。

誤用例 9. 仲人夫人に花嫁の手が取られた。

誤用例 10. 花嫁の手は仲人夫人に取られた。

上記の誤用例 1、誤用例 2、誤用例 5 及び誤用例 10 では、能動文の目的語、つまり「招待状」「車」「花嫁の手」が受身文の主語として取り上げられている。誤用例 1 と 2、誤用例 5 及び誤用例 10 のペルシア語訳（回答者自身による訳か筆者による訳かを明記）を見てみよう。

誤用例 1 と 2 のペルシア語訳：

Davatname tavasot-e dustam ferestad-e shod.→直訳： 招待状は友達によって送られた。

誤用例 5 のペルシア語訳：

Mashin tavasot-e agha-ye Suzuki jolo-ye khane-am park shod-e ast.→直訳： 車が鈴木さんによって私の家の前に止められている。

誤用例 10 のペルシア語訳：

daste aroos tavasote vasete(moarref) gerefte shod.→直訳： 花子の手は仲人夫人によって取られた。

以上のペルシア語訳を見ると、それぞれの例で非情物「招待状」「車」「花子の手」が受身文の主語の役割を果たしている。従って、このような誤用の要因がペルシア語、つまり、学習者の母語からの直訳によって生み出されていると思われる。ただし、問題 3 の誤用例 1 では、「招待状」を「が格」の主語にするなら、「友達」には動作主を示すマーカー（「から」あるいは「によって」）を付けなければならないにもかかわらず、能動文のまま「に」格にしていることに問題があるとも言える。この場合、受身文での動作主のマーカーについての誤解が間違いの原因になっている。

以上の誤用の他に、誤用例 2 では動作主、つまり、「友達」は省略されている。五十

嵐 (2005) によると、Windfuhr (1975) はペルシア語では、動作主が不明の時、動作主が判明していても、それが話し手や書き手の関心の対象ではなく、言及に値しない場合のみ、受身文が使われると述べているという (五十嵐 2008 : 2)。このことから分かるように、ペルシア語の受身文では通常、動作主が言及されないのである。動作主が省略された誤用例 2 の誤用はこの影響から出てくるエラーであると思われる。従って、ペルシア語母語話者に日本語の受身文を教える際には、受身の使用に対する日本語とペルシア語の相違点を強調する必要があると考えられる。

さらに分析を進めてみよう。問題④と問題⑤における能動文と受身文の語順を図式化すると次のようになる。

能動文 : A は B の C を …、する。

受身文 : B は A に C を …、される。

この図式によると、問題④の「鈴木さんは私の家の前に車を止めた」の受身文は、「私は鈴木さんに家の前に車を止められた」であり、問題⑤の「仲人夫人は花嫁の手を取った」の受身文は「花嫁は仲人夫人に手を取られた」である。つまり、能動文では、動作対象 C の所有格であった B を受身文の主語にし、動作対象 C は受身文でもそのまま「を格」を取り続けるのである。こうして、「B は C を … される」という受身の構造ができあがる。確かにこれは複雑な操作である。すなわち、問題④と問題⑤では、「私の家」「花嫁の手」(B の C) 全体ではなく、その所有主体、つまり、「私」と「花嫁」(B) のみを受身文の主語として立てなければならない。しかし、学習者は、動作影響を受ける人だけを主題として文頭に出すということが分からず、結果として誤用を起こしていると思われる。問題④と問題⑤の誤用例を見ると「私の家」と「花嫁の手」がそのまま「B の C」というかたまりとして残っていることが、誤用例 5 から誤用例 10 にかけて共通している。

また、「B は A に C を … される」という受身文の文型は誤用例には見られない。ペルシア語にはこのような三項を含む受身文の文型は存在しないので学習者にとっては理解が難しい面があるに違いない。また、三項受身は間接受身文にしばしば見られる文型であるが、間接受身の理解が不十分であるのも、ここに原因があるように思われる。さらに、誤用例 10 にはペルシア語の影響も見られる。なぜなら、ペルシア語では、「花嫁の手」という表現を受身の主語として置くことがあり、このような誤用の一因にもなっていると考えられるからである。

3.3.2 日本語受身文のペルシア語訳

一般に受身文よりも能動文を使用する傾向があるペルシア語母語話者は、日本語の受身文をペルシア語訳する際、「能動文に訳すのか。」、それとも「受身文に訳すのか。」、また、「ペルシア語には存在しない日本語の間接受身文をどのように訳すのか。」について、これらの問題をこの節で見たいと思う。

アンケート調査の大問 3 では、回答者自身が能動文から作成した日本語の受身文を

ペルシア語訳する作業も行ってもらった。その結果としては、ペルシア語の訳文全体で56%は能動文、44%は受身文として訳されていた。ただし、自ら作成した日本語受身文からペルシア語への逐語訳が多く、ペルシア語として非文である例もあり、さらに、日本語の受身文で明示されていた動作主がペルシア語訳では省略された場合もあった。もう一つ、ペルシア語訳に見られた傾向としては、だれが動作主であるか、だれが受動主であるかを判別できない場合もあった。以下において、ペルシア語訳の例をいくつか挙げている。

9. bad gooiye man tavasote uo karde shod. (非文) →直訳：私の悪口は彼によってされた。

10. mashin joloye khuneye man park shode. (動作主が省略) →直訳：車は私の家の前に止められた。)

11. Zane vasete daste aroos khanoom ra gereft. (能動文として訳) →直訳：仲人夫人は花嫁の手を取った。

12. davatname baraye dustam ferestade shod. (動作主・受動主判別不可) →直訳：友達のため、招待状が送られた。

4. おわりに

本稿では、ペルシア語母語話者が日本語受身文を学習する際の問題点究明を目的として、テヘラン大学の日本語学習者30名を対象にしたアンケート調査結果を実施、精査を行った。

この調査結果に基づいて、ペルシア語母語話者が日本語受身構造を学習する際の犯しやすい誤用は、以下のものであることが判明した。

- ・日本語の受身文における動作主のマーカである「によって」と「から」の区別に関する誤用。
- ・「受身」と形態的に類似する「自発」「可能」「尊敬」との混同。
- ・受身文を作る際に生じる誤用として、ペルシア語を日本語に逐語訳してしまうもの。

これらのことから、日本語の受身文に関するペルシア語母語話者の誤用要因は次のように分類できるように思われる。

1. ペルシア語の影響に起因する誤用
2. 日本語自体の性質に起因する誤用
3. 学習者の未熟さに起因する誤用

それでは、イランにおける今後の日本語教育において、こうした誤用を生み出す要因をどのようにして取り除くことができるであろうか。

3「学習者の未熟さ」は大きな問題であるにはちがいないが、教授法のレベルで解決することはできない。もちろん、日本語学習に対する動機付けを高めるなど、学習者の意欲を引き出す工夫が必要となってくると考えられる。

2に関しては、意味上のマーカーや助動詞の用法について、これまでの日本語教育でも触れられてきてはいるが、学習時間の不足、あるいは個々の用法の違いを十分に説明できてはいないなどのことが、学習者の混同を引き起こす原因となっていることは言うまでもない。個々の学習項目を教えるだけでなく、混同されやすい要素を相互に関連させながら、体系的な説明を行なうべきといえる。その場合においては、使用が可能な文脈だけでなく、使用が不可能な文脈を併せて提示するなどの必要があるだろう。なぜなら、学習者がある文脈に出会い、何らかの要素の選択を迫られたとき、使える要素と使えない要素をしっかりと区別する必要があるからである。とりわけ、上述の受身文の動作主マーカー、「受身」と「自発」の区別に関しては、より丁寧な説明が必要であると思われる。

しかし、最も重要な1の要因、つまり、母語であるペルシア語の構造に起因する誤用である。一般的に、外国語学習には直接法が望ましいとされており、それができない場合であっても、可能なかぎりの目標言語の発想に慣れることが大事であるとされている。そのこと自体は正しいのかもしれない。しかし、それにも関わらず、学習者にとっては無意識なレベルで、母語の影響が働いてしまう場合があるのである。つまり、本稿でも見られたように、ペルシア語構造に合わせて日本語の受身を理解してしまうことが、誤用の構図を生じさせてしまっている。このような誤用を避けるためには、母語と目標言語の文法の違いを対照・対比して教える方がよいのかもしれない。特に受身のような、その用法が両言語において差異がある場合などである。日本語母語話者が日本語の文法構造を意識して理解していないのと同じように、ペルシア語母語話者もまた、意識的にペルシア語受身構造を文法的には理解していない。このような状況が考えられることから、ペルシア語と日本語の両言語における受身構造の対照・対比を学習に盛り込んでいくことで、日本語の受身の理解は、ペルシア語母語話者にとってより容易なものとなっていくのではないかと考える。今後、母語であるペルシア語に起因する誤用を防ぐためには、目標言語である日本語の受身の説明方法を更に改善し、ペルシア語の文法構造それ自体を学習者に意識させる工夫について別途研究を進めて行きたいと考えている。

注

i V：動詞、Y：Vの動作主、X：主体を表す。

参考文献

- Dabir Moghaddam M.(1985). *Majhul Dar Farsi*. Majaleye Zabanshenasi Sale 2-Shomareye 1.
Najafi A (1987). *Goldan Tavasote Bache Shekaste Shod*. Nashre Danesh Sale 7-Shomare5.
Yossefi .Gh (1987). *Fele Malom bejaye Majhol*. Nashre Danesh Sale 8-Shomareye 1.
五十嵐小優粒(2007).「日本語とペルシア語の間接受身をめぐり考察」大阪外国語大学
日本語学科
五十嵐小優粒(2007).「ペルシア語の受動構文：shodan の二面性からの考察」

- 五十嵐小優粒(2008).「受身文と、いわゆる使役文の関係：日本語とペルシア語の比較」
大阪外国語大学域文化学科ペルシア語専攻
- 鈴木忍 (1978).『文法 I 助詞の諸問題 1 』(教師用日本語教育ハンドブック 3)(改 I 了
版)国際交流基金.
- 寺村秀夫 (1982).『講座日本語学 10 外国語との対照 I』明治書院.
- 寺村秀夫 (1982).『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1987).『命題の文法』くろしお出版.
- 村木新次郎 (1991).『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 森田良行 (1990).『日本語と日本語教育』凡人社.
- 森田良行 (2002).『日本語文法の発想』ひつじ書房.